



第25回日本エイズ学会学術集会 参加ご報告



会期:平成23年11月30日(木)~12月2日(土)

開場:ハイアット リージェンシー 東京

目次:

第25回エイズ学会参加 1~3
ご報告

平成23年度第2回中国・3
四国連絡協議会ご報告

看護部エイズワーキン 4
グ公開学習会ご案内

◆6階西病棟 看護師 宮原 明美



2011年11月30日から3日間、東京で開催された学会に参加しました。2011年は日本エイズ学会が発足して四半世紀(25年目)の節目にあたります。今年のテーマは「新たなエイズ

制圧への道」で、道を模索するための情報提供や、エイズへの理解を深めよりよい治療環境を提供する糧となることを強く願うとの高橋秀実会長の挨拶がありました。

これまでは、不治の病として恐れ忌み嫌う風潮があったエイズですが、抗エイズ薬の組み合わせによる強力な抗HIV療法の開発によって、慢性肝炎のような一種の「慢性ウイルス感染症」である位置づけになってきたと述べられていました。

今年度の学会内容は、エイズという疾患を「慢性ウイルス感染症」としてとらえることの重要性を鑑みた治療や看護、ソーシャルサポート等の報告が多く見受けられました。私が特に考えさせられたのは「今の医療に新たに求められているもの~自業自得・バチを巡って、スピリチュアル・ケアを考える~」と題したシンポジウムの中で患者への全人的なケアについての討論でした。

その中の一事例は、エイズ告知を受けると同時に40年連れ添った妻から離婚され、子供とも絶縁状態で絶望感

に陥っていた患者でした。その支援について、医師、カウンセラーのほか、チャプレンや住職など多方面の分野の演者と参加者がディスカッションを行いました。多様な背景を抱える患者の尊厳を守るとともに、患者のスピリチュアルな部分を見直すためには宗教も必要となります。つまり宗教を説明するのではなく、その人に応じて宗教的な説明が必要かどうかを見極める視点が医療者にも必要であるという討論は、HIV/AIDS看護に限らず日常の看護にも共通し重要なことであると感じ考えさせられた内容でした。

私は現在主に呼吸器疾患患者の入院病棟に勤務していますが、緩和ケアを必要とする患者も多く、まさにスピリチュアル・ケアとして、ひとりひとりの苦悩に向き合い対話ができる看護実践能力を高めていくことの大切さを実感しました。

近年全国的に増加の一途をたどるHIV/AIDS患者が、「慢性ウイルス感染症」として入院する機会も増えることが懸念されます。エイズワーキンググループとしてこれからも積極的な活動を継続し、HIV/AIDSの理解をより深め、看護の充実を目指していきたいと思います。

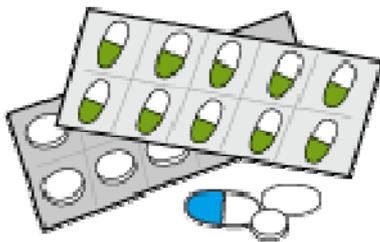
最後に、8年前のサンフランシスコ実地研修参加での恩師、鬼塚直樹さんや当時の参加者などに再会でき“皆さんがご健在で各地でご活躍されていること”に感動した有意義な学会参加でした。



◆血液内科外来 看護師 木下 一枝

HIV感染者やHIV診療関係者が多いと言われている、東京の中心地新宿での開催となった今回の学会は、アメリカで最初のAIDS患者が報告されてからちょうど30周年という節目の年にふさわしく、とても充実した学会でした。聴講したい発表がたくさんありすぎて、スケジュール調整に頭を悩ませるほどで、大変多くの学びが得られました。

その中でも、特に印象に残ったのは、アドヒアランスに問題を抱えながら外来通院を続ける患者への支援についてです。病院内のHIV診療チームだけでなく、地域の保健師や就労先の責任者、社会福祉協議会等と連携をとり、生活・就労・治療(服薬)すべてを円滑に実施できたという事例報告は、今後当院で同様の事例に対応する際のモデルとして、とても参考になりました。それと同時に、行政の協力を得ながら、HIV感染者を地域に受け入れてもらえるような取り組みや、連携先(地域の受け皿)の拡充が急務であることがわかりました。



また、性依存や薬物依存・買い物依存などの問題を抱える患者に対する、相談しやすい診療環境づくりについての発表があり、日々外来で患者に関わる上で参考になりました。

ました。

依存症をもつ患者は、アドヒアランス低下や受診中断を来しやすいため、状況把握と適切な支援が必要となりますが、なかなか本人からは話題に上らず、察知が難しいのが現状です。外来での患者面談時には、「なんでもドーンと相談してください！」という気構えで臨んでいます。私の力及ばぬところはHIV診療チームのメンバーに協力を得ながら、今後もHIV患者のケアに邁進してまいります。

◆ICU 看護師 石川 千晶

2011年は、後天性免疫不全症候群(エイズ)という疾病が報告されてから30年目に相当します。この節目の年に開催された学会に参加することができ、医療体制、新薬の開発、また社会福祉に至るまで、エイズ医療が飛躍的な進歩を遂げたことを改めて実感しました。

しかし「不治の病」から「慢性感染症」という位置づけにまで変化した現代においても、多くの課題は存在しており、治療法が進み予後の改善が図られたからこそ新たに発生した課題もあります。そのような課題に対し、看護師が担う役割について学ぶことができました。



多くの他の疾病がそうであるように、エイズ医療では特に疾病の特徴からも、チーム医療体制がとられており、患者を中心に多くの職種の専門家がそれぞれの立場で患者と関わっています。その中で看護師は、特に患者との関わりも多く、患者にとっては一番の相談役で窓口でもあります。患者が、今現在抱えている問題やニーズを把握し、専門家へ適したタイミングで繋げていくことが必要です。そして、多方面から得た情報を医療チーム内へ還元し、チーム内での情報共有、目標の統一を進めていくことが看護師の役割であり、チーム医療がうまく機能していくために必要不可欠なことであることが学べました。

また、エイズが慢性疾患となりつつある現代において、地域との連携も大きな課題となっています。エイズ医療は、専門機関が担っている場合が多く、また、依然として偏見を持たれていることも現実で、患者が医療施設から地域社会へ戻る際、受け入れに難渋するケースが多々あることを知りました。

看護師は、患者が他の人々と同様に、訪問施設や介護施設を利用できるよう、環境作りをしていく必要があります。そのためには、施設で働く人々にエイズについての正しい知識を得てもらい、不安要素を減らしていくことが必要です。

看護師として、知識や最新情報の伝達・教育を継続していくこと、いつでも連絡・相談ができる体制を整えていくことが課題としてあるとわかりました。

エイズ医療の進歩とともに患者の高齢化が進む現代において、患者が長期にアドヒアランスを維持していくためには、看護師は、その時々々の患者のニーズを把握し、患者を取り巻く環境をコーディネートしていく大きな役割を担っています。私もエイズブロック拠点病院で働く看護師の一員として、少しでもその役割を担っていけるよう努力していきたいと思っております。



◆9階西病棟 看護師 藤原 望美

今回、エイズ学会学術集会に参加し、HIV・AIDS患者の抱える身体的・精神的問題、薬物依存などの社会的問題に触れ、看護師だけでなく多職種の専門的なアセスメント視点を知ることができました。また社会福祉法人やNPO団体などのHIV・AIDS患者の支援団体の存在や活動について知識を深めることができました。

学会シンポジウムでは、介入困難な2事例を用いて、シンポジストである医師・看護師・薬剤師・カウンセラー・MSWによるケースカンファレンスが開催されました。そのうちの1事例はPCP発症しHIV陽性が判明した事例でした。食道がん併発のため嚥下困難となった患者であり、ワーキングメモリー機能低下(聴覚からの情報に対する理解力は低下を認めるが視覚からの理解力は保たれている)を認めた患者への支援についてでした。



患者は入院前より全国を車で周遊する生活を送っており、患者の一番の希望は退院後も同じように生活することでした。患者は生命予後を改善するARTのみの継続を希望し、ARTを行うための胃ろう増設については了承され、増設後、自己管理可能となった時点で退院となりました。その後は連携先の病院での受診を続けながら、全国周遊する生活を続けることができた事例でした。

事例を通して、HIV/AIDSは多剤併用療法により長期にわたりコントロール可能な疾患となり、治療を継続しながらその人らしい生き方が送れるよう支援することの重要性を強く感じました。さらに、医師・看護師だけでなく多職種が連携することで、患者のQOLを高め、個別的な援助に繋げることができ、またその多職種との橋渡しを行うのが患者の一番近くにいる看護師の役割であると学ぶことができました。

事例を通して、HIV/AIDSは多剤併用療法により長期にわたりコントロール可能な疾患となり、治療を継続しながらその人らしい生き方が送れるよう支援することの重要性を強く感じました。さらに、医師・看護師だけでなく多職種が連携することで、患者のQOLを高め、個別的な援助に繋げることができ、またその多職種との橋渡しを行うのが患者の一番近くにいる看護師の役割であると学ぶことができました。

患者のライフスタイルは多様であり、看護師だけでは解決できない問題は多々あります。今回の学びを生かし、今後も多職種と協働し、患者の抱える問題について包括的に関わり支援していきたいと考えました。

◆平成23年度第2回中国・四国ブロックエイズ治療拠点病院等連絡協議会ご報告

平成24年1月13日に、ひろしま国際会議場で、「平成23年度第2回中国・四国ブロックエイズ治療拠点病院等連絡協議会」が行われました。

中国四国ブロックのエイズ治療拠点病院及び広島県内のエイズ診療協力病院に勤務する医師、看護師、薬剤師、心理士、ソーシャルワーカーなどの医療従事者と各県の行政関係者など、約120名が参加しました。当院からは22名参加しました。

会議プログラムは下記となります。

14:30～14:35 開会 あいさつ

14:35～15:35 報告

座長 土井正男先生(県立広島病院 主任部長)

「岡山県におけるHIV感染者及びAIDS患者の診療体制の現状～エイズ治療拠点病院連絡会議の役割～」
講師 和田秀穂先生(川崎医科大学附属病院 教授)

「山口県におけるHIV感染症医療の状況」

講師 藤井康彦先生
(山口大学医学部附属病院 准教授)

15:45～16:15 患者からの提言
地域原告

16:15～17:00 特別講演

座長 野田昌昭先生(広島市民病院 内科部長)

「長期療養を考慮に入れた血友病・HIV感染者診療のポイント」

講師 岡 慎一先生(国立国際医療研究センター
エイズ治療・研究開発センター センター長)

〈ご意見募集〉

ご意見やご希望がございましたら、
エイズ医療対策室(内線5351)まで
お寄せください。

看護部エイズワーキング 公開学習会のご案内

HIVが身近にあるものだとおぼろげに知ってくださいます。ご参加お待ちしております。



<公開学習会のテーマ>

HIVの動向と看護
～当院における現状報告を中心に～

<公開学習会の内容>

- ・当院における HIV 患者の外来・入院加療の状況報告
- ・エイズ医療体制について
- ・事例紹介
- ・療養支援の実際

日時:平成 24 年 2 月 2 日(木) 17:30~18:30

場所:外来棟2階会議室(スターバックスの横)

**対象:看護師、歯科衛生士、看護学分野及び
口腔健康科学分野の学生・院生 等**

★当日参加可能です。直接会場へお越しください。

**お問い合わせ先: 6階西病棟:宮原明美(内線:5498)
ICU:下川直美(内線:5586)**



看護部エイズワーキンググループ